

審査の結果の要旨

論文提出者氏名： 入江 哲朗

入江哲朗氏の博士論文「パーシヴァル・ローエルと世紀転換期アメリカ思想史——ロマンスからロマンティック・サイエンスへ」は、アメリカ合衆国の作家・天文学者パーシヴァル・ローエル（1855-1916）の生涯を、南北戦争前後から 20 世紀初頭のアメリカで生じた文化・社会上の変化を背景に論じた研究である。入江氏は、新発見のものを含む多数の一次資料の調査にもとづいてローエルの生涯を追跡し、文学史においても天文学史においてもなかなば忘れられたこの人物が、20 世紀のサイエンス・フィクションを準備した「消滅する媒介者」として歴史的意義をもつことを明らかにしている。

本論文は、序論、5 章からなる本論、結論からなる。

序論「「消滅する媒介者」としてのパーシヴァル・ローエル」では、SF の創始者のひとり H・G・ウェルズの『宇宙戦争』が、ローエルの火星研究を参照していることから、SF を準備した「消滅する媒介者」としてローエルを検討する見通しが提示される。また、ローエルを 19 世紀ボストンのエリート社会（「ボストン・ブラーミン」）の枠内で論じてきた先行研究に対し、世紀転換期アメリカ思想史という文脈のなかに位置づける、という企図が説明される。ボストンのローカルな文脈と、SF 史というグローバルな文脈を、アメリカ思想史というナショナルな文脈によって架橋することで、ローエルの歴史的意義を明らかにすることが、本論文の目標として設定される。

第 1 章「ボストンにおける「ローエル王朝」の確立」では、ボストンのエリート一族であったローエル家の歴史が、17 世紀のアメリカ移住にさかのぼって概観される。産業革命にともなうニューイングランドの発展と深く結ばれたローエル家の歴史および「ボストン・ブラーミン」の文化は、パーシヴァルにとって誇りと反発の対象となる。その文化は、のちに確立されたアメリカ文学史では傍流に追いやられるが、19 世紀当時には主流をなしていた。

第 2 章「19 世紀ハーヴァードのプロフェッショナルライゼーションと形成期のローエル」では、ボストンのエリート文化の中核であり、ローエルも学んだハーヴァード大学が、南北戦争後のアメリカ社会の変化のなか、チャールズ・ウィリアム・エリオット学長（1869-1909 在任）のもとで進めた改革が検討される。人格形成やジェネラルな知の獲得を目標とし、修辞学など古典的カリキュラムに重きをおいたそれまでの教育体制に対し、エリオットは実学的な専門知の教育研究を打ち出し、学問のプロフェッショナルライゼーションを進めた。それは「ボストン・ブラーミン」の文化を脅かす改革でもあった。

以上の歴史的背景の検討を経て、第 3 章以降では、ローエルがボストンの閉鎖的環境に反発しながらも、その精髓であるジェネラリスト的な知を守ろうとしたことが、その生涯を通じて明らかにされてゆく。

第 3 章「ローエルが東アジアに見出したロマンス」では、故郷を飛び出して日本滞在を重ねたローエルの足跡と、朝鮮や日本をめぐるその著作が検討される。とりわけ重視されるの

は旅行記『能登』（1891）であり、能登をまだ見ぬ恋人に見立て、それへの憧れと幻滅を語るロマンス的な構造が指摘される。それとは対照的に、次作『神秘の日本』（1894）でローエルは、御嶽山の宗教儀礼を科学的スタイルで記述する。ロマンスと科学のあいだでのこの揺れは、のちのローエルの天文学研究でも重要となる。

第4章「ローエル天文台が19世紀アメリカ天文学史に占める位置」では、19世紀のアメリカにおける天文学および天文台の歴史が、「古い天文学」（天体力学）から「新しい天文学」（天体物理学）への遷移を軸に論じられる。ヨーロッパに立ち遅れたその発展と遷移を推し進めたのはハーヴァード大学であり、天文台建設のスポンサーとしてそこに加わったローエルは、1896年の火星の「衝」を前にして、みずから火星観測に熱中してゆく。

第5章「火星運河論争とローエルのロマンティック・サイエンス」は、本論文の中核である。みずからの観測を通じてローエルは、火星に運河が存在するという「火星運河説」の唱道者となる。おのれの見たいものと実際に見えるものとのあいだで揺れるローエルの火星観測は、『能登』にさかのぼるロマンス的志向に支えられた、「ロマンティック・サイエンス」と呼ぶべきものであった。すでにプロフェッショナル化された20世紀初頭の天文学界に対し、ロマンスと科学の両立可能性に立脚するローエルのロマンティック・サイエンスは、ジェネラリスト的な知のありかたにもとづくものだったといえる。そんなローエルの試みは、学界からは排除されたものの、文学を科学の領域に拡大するSFを準備したことが、H・P・ラヴクラフトを例に検討される。

結論「ローエルのイマジナリー・ライン」では、以上の議論を総括し、20世紀のSFと天文学の発展を準備した「消滅する媒介者」としてのローエルの意義が明確化されている。

ローエルの生涯と、アメリカの社会史・文学史・天文学史におよぶきわめて広範な文脈について、徹底した資料調査をおこなったうえで、このなかば忘れられた人物の歴史的意義を明らかにした本論文に対し、審査委員会では一致して高い評価が与えられた。アメリカ研究のみならず、ローエルの日本滞在をめぐる詳細な史料調査は、日本史学においても貴重な成果とみなされるであろうし、SF史の研究にも新たな一石を投じるものと期待される。問題点としては、論点を先回りして記す文体のわずらわしさや、ローエルの評伝部分の記述が分厚く、その歴史的意義の論述がまだ十分でないと思われること、相対性理論の登場に代表される20世紀初頭の物理学革命との関係が触れられていないことなどが指摘された。しかし、本論文ではまだ十分には展開されていないそれらの歴史的な文脈に関しても、今後の入江氏のアメリカ思想史研究やSF史研究において検討されてゆく見通しが述べられており、本論文の内包する豊かな発展性を示しこそすれ、その学術的価値を損なうものではないことが確認された。

以上により、本審査委員会は全委員一致で、本論文を博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。